仲間に、お接待に勇気づけられ

明徳短大歩き遍路 体験学習レポートから

～ ㊥ ～

私の宝物が一つ増えた

生活福祉科一年
近藤　晶奈

午前八時半、バスで霊山寺に到着。一三四キロ、長い長い五日間の遍路旅が始まりました。

最初は「やり遂げられるかな」という不安もありましたが、大勢の仲間たちが頑張ろうという気持ちにさせてくれました。

最初はみんなについて行けたけれど、だんだんきつくなり諦めようとしたこともありました。でも、仲間たちがいたから最後まで行けたと思います。この遍路で仲間たちからたくさんのパワーをもらったような気がします。

悔しかったことがあります。体調を崩してしまい、二回も車に乗ってしまったことです。一緒に歩きたかったけれど、みんなの足を引っ張ってはいけないし、迷惑をかけてもいけないから車に乗りました。

私は山の中でお腹が痛くて歩けない時、先生方や新聞記者の人達に迷惑をかけてしまいました。私のことを抱えてくれた人もいました。名前は分からないけど、二人のうち一人は新聞記者の人でした。その人は途中でいなくなったので、次の日の夜お礼を言いました。そうしたら「今度、僕が倒れたら抱えて行ってね」と言われました。

すごく面白い人だなーと感激しました。また機会があれば話をしてみたいと思っています。一生忘れることのできない出来事でした。

この遍路でたくさんの人と出会えました。「テレビで見たよ」と声をかけてくれた人や「がんばりよ」と言ってくれた人、そしてお接待してくれた人達もいました。温かい人達がたくさんいることに、正直ビックリしてしまいました。すごく嬉しくて、涙が出そうになりました。私にとって一つ宝物増えたような気がします。

途中、車に乗ってしまったけれど、諦めずに最後まで歩けたことがこれからの自信にもつながると思っています。遍路が終わってしまい寂しい部分もあるけれど、このことを忘れないように「これからも頑張ろう」と思っています。先生方、お疲れさまでした。ありがとうございました。

無事完歩、一生の思い出

生活福祉科一年
（社会人入学）
河渕美知子

九月十六日早朝五時三十分、意気揚々とバスに乗り込みました。まだ薄暗い今治の街を後に、一路霊山寺に向かいます。霊山寺到着は八時四十五分。そこには四国放送が取材に来ており、私もいろいろ聞かれました。

第一番霊山寺は旅立ちにふさわしい雰囲気を漂わせています。バスに乗せていた荷物を背負い、歩き始めました。しばらくするとリュックが肩に食い込み、前屈みの状態で歩くため胸が苦しくなりました。今日一日歩けるだろうか？

大日寺で休憩しているとき、先生から「河渕さん、荷物を車に乗せてもらってください」と声をかけてくださり、小さなリュックだけ背負って歩くことにしました。急に元気が出てきて、続けて歩くことができました。

しかし七番～八番が長く、何回も足にスプレーを吹き付けながら切幡寺を目指しました。

翌日、目を覚ますと大雨でしたが、六時十分、藤井寺へ向け出発するころには小雨です。焼山寺への山道はとっても厳しく、無我夢中で登りました。ご詠歌の「のちの世を思えばくぎょう焼山寺死出や三途の難所あり」は、やっぱり―と納得できました。

十三番大日寺へ至る県

（次ページへ続く）

（前ページから続く）

道でおばあさんが走り寄ってこられ、「前の人もご一緒ですか」と手作りの袋を二ついただきました。日頃から暇を見つけてはコツコツと袋を作っているおばあさんの姿が目に浮かび、感激しました。一生の思い出として、使わせていただきます。（中略）

太龍寺に向かうころには体力の限界が近いと思うようになり、やがて血尿が出て驚きました。あと七キロ余り、歩けるか不安がありましたが、度々のお接待に勇気づけられました。麓では地元の人達がおぜんざいを作って待っていてくれました。「あと二十分もあれば平等寺に着きますヨ」。

無事完歩出来たことは、私の一生で忘れ得ぬ思い出になりました。

二度とこんなしんどい事はしないだろう―と思っていましたが、日がたつにつれ苦しさが薄らぐように思います。行く前は「主人の冥福を祈ってあげよう」と思っていたのですが、歩くことで精いっぱいでした。次はゆっくりと、祈りたいと思っています。

歩くことに執念抱く

幼児教育学科一年
山本　義孝

第4番大日寺山門から第5番に向う学生

「歩ききった」この思いだけで二、三日はほとんど放心状態だったが、ようやくボンヤリした思い出になろうとしている。

記憶の中の五日間は、たしかに辛かった。が、辛い中にもどこか崇高さにも似た美しさが満ちており、単なる思い出にしてしまうのが惜しい存在になっている。何故そうなったか、振り返ってみたいと思う。

当日、バスに乗る寸前まで「何とか歩かずに済む方法は無いものか」と、心のどこかで思っていた。その思いはバスが目的地に近づくにつれ、半ばあきらめのようなものに変わっていった。それでも一日目はなんとか歩くことができた。初日でもあり体力に余裕があったからだろう。しかし、その夜の時点では「帰りたい」との思いが強くなっていた。

〝歩く〟ことに対してある種の執念を抱きはじめたのは、二日目以降からだと思う。皆一様に疲労の色が見えはじめ、歩くのが困難になる仲間もでてきた。

「もういいや…」「なぜ俺がこんなめに」と何度思ったか知れない。それでも歩けたのは、仲間がいたから。率先して皆に檄を飛ばし励ます仲間を見る度、「自分だって疲れているはずなのに、こいつも頑張ってるんだ」「ここで止めたら格好悪いな」と考えたから。

格好悪いというのは、周囲にではなく自分自身に対してである。「ここで諦めたら、俺は一生自分を嫌いになるだろうな」、そう思いながら必死で歩いた。

三日目、精神的疲労がピークに達した。肉体の疲れはどうにかなるが、気力が参ってしまってはどうにもならない。傍目にも分かるのか、仲間がこれまで以上に励ましてくれた。彼らの思いに応えようと思ったのだが、結局自動車に乗らざるを得なくなった。自分に対する情けなさで、胸がいっぱいだった。

私は泣いていた。ひとしきり泣いたら、私の中で何かが吹っ切れた。これまでは自分の為だけに歩いていたのだが、「皆の為にも」と心境が変化していった。もちろん、誰も私にそんな期待をしていなかっただろう。しかし、自分を励ましてくれた仲間を裏切れないと思った。残りの二日間は、その想いだけで歩いたと言っても過言ではない。

ゴールしたときの皆の表情は満面に笑みを湛える者、感涙にむせぶ者…、それぞれの心の内を物語っていた。彼らに元気をもらい、勇気づけられながらのゴールは純粋に嬉しかった。桑原先生が手を差しだしながら「ありがとう」と言った。私はその手を握り、様々な想いを込めて「ありがとうございました」。胸が熱くなった。

私が体験した感動は、口先だけで伝えられるほど薄っぺらなものではない。だが、それでもかまわない。人の優しさ、温かさに触れ、心から「ありがとう」と言える喜びを、今回の体験で知ることができたということを知って欲しいのだ。